



しいの木会会長  
坂藤 政文さん  
(北方地区・羽ヶ瀬)

市内には畜産後継者でつくる『和牛研究グループ』がいくつかあります。そのひとつである『しいの木会』。今回の全共で第4区に出品、見事日本一に輝いた岩下信さんも会員の1人です。ともに向上を目指し、支え合ってきたメンバー。会長の坂藤政文さんに話を聞きました。

「メンバーは9人。先進地視察やセリの反省会、年間優良成績者表彰を企画するなど、互いに刺激を受け合いながら活動してきました。だからこそ、岩下さんの全共出品は本場にうれしかった」と坂藤さん。全共の会場で応援したいとの思いがありました。岩下さんの飼育の世話を買って出ました。「歓喜に沸いた日本一の瞬間に喜び合えなかったのは正直、残念でした」と複雑な思いをにじませつつ

も「みなそれぞれに役割があると思う」と語ります。そして「JAや行政の人は指導という役割があり、しっかり日本一という成果を持ち帰って来てくれた。グループの役割は支え合い、高め合うこと。留守を預かり、岩下さんを不安なく送り出すことが自分たちにできること」と続けます。

こうして市内2カ所の牛舎にいる計100頭の牛をメンバーがふた手に分かれて世話を担当。「生きものなので病気が心配でした。何事もなく牛が元気でいてくれたので、今はホッとしています」と安堵する坂藤さんです。

全共を振り返りこう結びました。「今回の日本一にみなが刺激を受けてくれるといいですね。南那珂管内の畜産農家が『彼らが日本一になれたのだから、自分にもできるんだ』と奮起してほしい。南那珂の畜産が盛り上がり、市場価格も上がり、地域の活性化につながる。技術・経営の向上をみなで実現していきたいです」。

## 支え合い、ともに上を目指す和牛研究グループ



全共での留守中、手分けして牛を世話してくれたグループのメンバー。みんながいたから行けた全共であり、とれた日本一だった。出品牛も、ほかの牛もすべてが大事。全共から帰り、家の牛がみな元気でいてくれたこと、世話してくれたメンバーに感謝の気持ちでいっぱい(第4区優等賞主席・岩下信さん)。

# 日本一を支えた人々

〜彼らの支援・導きがあったから〜



何年と牛飼いをしてきて、初めて人の意見を受け入れた。彼らについて行けば、必ず良い結果が出るとの信頼があった(第4区優等賞主席・黒木松吾さん)。

とにかく毎日、牛舎に足を運んで牛の手入れ、調教を指導してくれた。彼らがいれば日本一になれた(同・吉田正彦さん)。

## 心をつなぎ、高みへ導いた技術員

今回の全共では、串間・日南の両市から5頭の牛を出品。『日本一』獲得のため、JAと行政の畜産技術員チームが丸となって出品牛を指導しました。約4カ月間、通常の業務をこなしつつ、朝夕毎日、出品牛の手入れに励んだ日々。第4区出品牛を指導し、当日は出品介助者を務めたJAはまゆう畜産部主幹・井手幸彦さんに話を聞きました。

「JAはまゆうからは自分のほか3人(串間市・和田康秀さん、同・武田克樹さん、同・吉田安伸さん)と、串間市役所(串間市・武田則英さん)と日南市役所(日南市・山倉一浩さん)から1人ずつの計6人の技術員で出品牛を世話しました。6人を3人ずつ、日南と串間の2手に分け出品牛を担当。毛並みを整えるためのシャンプーにブラッシング、美しい体づくりと調教を兼ねた引き運動、立たせ方などの確認を徹底してやりました」

担当した4区は4頭1組の出品区で、4頭の連携が最も重要。ときに



JAはまゆう畜産部主幹・技術指導員  
井手 幸彦さん

は出品者に厳しいことを言わなくてはならない場面もありました。「自分たち技術員は手入れをし、結果を出すことで理解を得られるよう努めてきました」と井手さん。また、出品者間の連携を強化するため、互いの牛舎を訪ね飼育状況を確認し合うなど『調整役』も努めました。

全共を終えた今、こう語ります。「大切なのは人と人とのつながりです。自分たち技術員は、先人たちの思いを引き継いできました。今回の日本一は、今までの改良で良かったということの証明になりました」。

一朝一夕には成し得ない改良だからこそ、すでに次を見据えている井手さん。「5年後の宮城全共では地元の種類牛『秀菊安』で日本一を獲得したい」と気持ちを新たにしています。